
Hot Hearts

しゅ〜と

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H o t H e a r t s

【Nコード】

N 6 8 8 1 L

【作者名】

しゅくと

【あらすじ】

「同じ高校でバッテリーを組みたい」そう思って同じ高校を受験した鳴沢 将人と桐生 怜二。だが鳴沢は受験に失敗して熱い野球ストーリーがここにある。

Prologue

Prologue

3月上旬。小学生、中学生、高校生にとっては卒業のシーズン。

別れの季節でもある。

そして、卒業式を終えた中学生には高校受験というものが待っている。

感傷に浸っている暇もなくみな勉強に励む。

そうして受験を終えたら終えたで今度は結果発表までの時間がこれまたしんどいものである。

満足な出来のものは一安心であろうがそうでないものにはこの時間はまさに地獄である。

ここにいる一人の少年も“そうでないもの”の一人である。

「ダメだ。ぜってーに落ちた。なんでもっと勉強しなかったんだ」

大柄で筋肉質な体格である。とても中学生には見えない。

「大丈夫だつて！今年はそんなに倍率高くないからきつと受かってるよ」

こちらは体格こそは一般の中学生と変わらないが凛々しい顔立ちに

よって大人びた印象を受ける。

「お前は自己採点良かったからそんなこと言えるんだろ！！俺なんてボロクソだったんだぞ…」

「でもギリギリ合格ラインの点数はあったじゃないか！…本当にギリギリだけど」

「たった2点合格ラインより上なんて不安で仕方ねーよ」

思わず大人びた少年は苦笑いを浮かべる。

「早く同じ高校でバッテリー組みたいな」

「ああ。俺も早くお前とバッテリー組みてえよ」

2人はそろって部屋に飾ってある金色の盾を見つめた。

“AA世界野球選手権大会優勝”と刻まれていた。

そして時間は流れていよいよ合格発表の日が来た。

「眠てえー。さすがの俺も昨日は緊張して寝れなかったぜ」

そう言いながらダルそうに眼をこする。

「俺も昨日は全然寝れなかったよ」

「余裕のくせに良く言っぜ」

「そんなの結果が見るまで分からないじゃん」

会話をしながら歩いていると2人が受験した高校の前までやって来た。

和歌山県立^{しゅうわ}翔和高校。

昨年度の和歌山県の夏の覇者で和歌山県の中でも甲子園出場最多数を誇る野球の名門校である。

2人が到着した頃にはすでに大勢の受験生たちが結果はまだかまだかと待っていた。

現在午前9時57分。結果が掲示されるのが午前10時である。

「なんかみんな頭よさそうだね…」

「ああ…やっぱり受かってる感じがしねえよ…」

周りの受験生たちがさっきにも増して騒がしくなっている。教師らしき者たちが大きな紙を持って受験生の前に現れたのだ。

そして午前10時。丸められていた紙が広げられ、びっしりと書かれた数字が現れた。

「やったー！！番号あったぞ！」

「あったあった！これから同じ学校だね！」

結果を知った受験生のほとんどが歓喜の渦に包みこまれ、友達と手を取り合い喜ぶ者や携帯電話で報告をしている者など様々である。中には顔を覆って崩れ落ちている受験生もいる。かわいそうなことに番号がなかったのであろう。

2人の少年は人ごみの中をかき分けていく。

「えーっと俺の番号は…」

大人びた少年がたくさんある番号の中から自分の番号を探す。

「246…247…249…250!! 将人^{まさひと}！受かったぞ…
って、あれ？将人？」

少年が大柄の少年の名前を呼ぶ。どうやらこの人ごみで途中はぐれてしまったのだらう。

少年が辺りを見回す。右に4mほど離れたところに他の受験生と頭一つは違うであろう少年がいた。

大柄なだけあってすぐに見つかった。少年は人ごみをかき分けて大柄の少年に近付く。

「将人！俺は受かったぞ…ぞ…」

声をかけたが最後の方は声が消えかけていた。

大柄の少年は棒立ちで無表情な顔で貼り出された紙を見つめている。

「…将人？」

「ごめん 怜^{れいじ}。俺落ちてたわ」

少年と顔を合わせずにつぶやく。

「ホントにごめん。……ごめん」

1回少年の方を見ると大柄の少年は校門の方へ歩いて行った。

少年は追いかけることができなかった。

別れの季節でもある。

1

「将人！もういい加減起きなさい！春休みだからっていつまでも寝てるんじゃないよ！！」

そう言っつて布団を強引に引っぺがす。

「うう…うるせえな…どんだけ寝ようが俺のかってだろうが…」

奪われた布団を再び取り戻し眠りにつこうとする。が、

「今日は野球部見てくるって昨日言っつたでしょ！さっさと起きなさい！！」

閉じかけていた目がその一言で見開く。

「あー、そうだったわ」

大きな体をベッドから起こし、階段を下りて洗面所へと向かう。

蛇口をひねり水を出す。手を差し出すと程よい水の涼しさでさらに目が覚める。

顔を洗って歯を磨きしつかりと口をゆすいでからリビングに行くところにはベーコンエッグとこんがりと良く焼けたトーストが用意されていた。

「いただきます」

両手を合掌して勢いよくトーストにかじりつく。

「そついえば最近怜二君遊びに来ないわねえ。何かあったの？」

ピクツと手が止まる。

「ああ、翔和高校は野球部寮があるんだよ。だからもうこっちにはいねえんだよ。言ってなかったか？」

「聞いてないわよ。だってアンタ受験に落ちた日から怜二君の話全然しなくなっただんだもん」

あの時に記憶が蘇って来る。

28番。俺の受験番号だった。

27番と29番はあった。でも、俺の番号はなかった。

何回も自分の受験番号を確認したし合格発表者の紙も見た。でもやっぱり俺の番号はなかったんだ。

不意に周りが静かになった。

さっきまではあんなに騒がしかったのに今は何も聞こえない。

心臓の音だけが妙に響いてきた。

心臓の音ってこんなにうるせえんだなって感じたのを今でも覚えて
いる。

「将人、俺は受かったた……ぞ……」

怜二の声が耳に入ってきた。その瞬間周りはさっきと同じように騒がしくなった。

俺は謝ることしか出来なかった。

約束守れなくてごめんって謝りたかった。けど、その言葉は出てこなくてごめんしか出てこなかった。

バッテリー組めなくてごめん。

「ちょっと将人ー。早く食べちゃってちょうだい。お母さん忙しいんだから」

母の一声で現実に戻された。

「わ、わかったよ!」

ベーコンエッグをトーストの上に乗せて一気に平らげる。

「ごちそうさん。んじゃあ行ってくるわ」

「はい。気をつけてね」

昨日のうちに玄関に用意してあったスポーツバッグを肩にかけて家

を出す。

車の横に止めてる青色の塗装が施された自転車にまたがり目的地へと出発した。

5分ほどすると学校が見えてきた。春休み中といえど部活をしている生徒はいるので正門は開いていた。

正門を左手に曲がったところに広いグラウンドがあった。

覗いてみるとサッカー部や陸上部が黙々と練習をしている。

しかし、どこにも野球部らしい者はいない。

サッカーボールはあっても野球ボールはない。

サッカーゴールはあってもベースはない。

「おつかしいな。今日は休みか？」

首を傾げる。誰かに今日は野球部はどうしたのか聞こうとした矢先、4人組のちよつとした集団がこちらに向かって歩いてきた。

ちようどよかったと話しかけてみる。

「すいません。今日は野球部って休みですか？」

4人が顔を見合わせる。そして不思議そうにこちらを見る。

「野球部はこのグラウンドじゃやってないんだよ。俺らも今から第二グラウンドに行くつもりだから一緒に来るか？」

「おう！頼むぜ！……ってじゃあアンタらも野球部？」

「そうそう。俺ら全員今年入学なんだ。最近顔出して体動かしてんのよ。君も今年入学？」

「ああ。俺は鳴沢将人^{なるさわ}ってんだ。よろしくな！」

「よろしく。俺は天谷猛^{あまやたける}。これからよろしく」

こんがりと焼けた肌に坊主頭。さらに高身長。まさに野球部と言った感じの男だ。

「僕は^{おおむらしんじ}大村進次！！よろしくね！鳴沢っち！」

ひょこつと天谷の横からいきなり出てきた。

あまりの小ささに鳴沢の視界からは完全に消えていたのである。その小ささと童顔も相まって小学生に見えてもおかしくない。

「な、鳴沢っち？…まあよろしくな。てか身長いくつだお前？」

「むっ！いきなり人のコンプレックスに触れてくるとは失礼だな！…でも教えてあげよう。僕は160cmだ！とうとう大台の160cm台になったのだ！！」

眩しいほどの笑顔で鳴沢にVサインする。

こうしてみると本当に高校生が怪しい。小学生と言っても十分通用するだろう。

「ホントは159cmだけどな」

天谷が冷静に突っ込みを入れる。

「159cmも160cmも一緒だもん!!」

「全然違っつて…」

「1cmくらいごまかしても分からないもん!」

大村が顔を真っ赤にして天谷に言い寄っている。

「まあまあ大村もムキになるなつて。俺は吉井慧^{よしけい}。よろしく、鳴沢」

大村をなだめながら鳴沢に握手を求めた。
鳴沢もそれにこたえて握手を交わした。

「さ、着いたぞ」

そこには立派、とまでは言えないがそれでも野球をするには十分に整備されたグラウンドがあった。

「おおー。こんなところにグラウンドがあったのか」

グラウンドの端にある錆びれた扉を抜けてしばらくしたところにこのグラウンドはあった。

初めての者には決して分からない場所だろう。

「もうすぐ先輩も来ると思うけどそれまでキャッチボールでもするか?」

「いいね!すぐ用意するから待ってくれよ!」

スポーツバグからキャッチャーミットを取り出して適当に天谷と距離をとると、

「待てよ鳴沢。キャッチボールより俺の球受け取れよ」

今まで全く会話に参加せず終始仏頂面だった男が初めて口を開いた。

「へえー。俺がキャッチャーだって分かるのか。…ああ、ミット持つてるからか」

「そんなんじゃないよ。…田辺ベイレックス出身、全日本正捕手の鳴沢将人君」

「はは…もしかして俺って有名？いいぜ、受けてやるよ」

そして鳴沢はホームベースへ、仏頂面の男はマウンドへと向かう。

「おい荒賀！あんまり勝手な真似まねすると怒られるぞ！！」

「ちょっと投げるだけだ。大丈夫だ」

そう言っただけで荒賀と言われた男は足場をならす。

「いきなり投げるのか？肩作らねえと危ね」

「肩ならもう作ってある。心配するな」

「そーかい。そーかい。なら、好きなところに投げてきな」

鳴沢が大きく両手を広げ、それから右手でミットを叩いて構える。

「（久しぶりだな。人の球取るのは）」

「（鳴沢将人：お前の実力、俺が見てやる！）」

荒賀が大きく振りかぶった。そして左足をあげて腕をしながら…投げる！！

グラウンドに乾いた音が響き渡った。

「ナイスボール。結構いい球放るじゃん」

荒賀にボールを返球する。

ボールをグラブに収めるとすぐさま投球動作に入って…投げる！

同じ作業を何回も繰り返す。

十数球投げたところで荒賀が口を開く。

「次、カーブ行くぞ」

「オッケー。カーブでもスライダーでも何でも放って来い」

荒賀が投球動作に入ってボールを手から放つ。

ここまでは今まで通りだがベース直前で球が斜め下に大きくスライドする！

「つと！」

鳴沢はミットに収めることができず前にボールを落とす。

「縦割れのカーブか。今時珍しい球だな」

「お前、あんまりキャッチングうまくねえな」

ただ一言言い放った。その言葉を聞いて鳴沢は苦笑いを浮かべる。

「確かに俺はキャッチングもへたくそだしリードもうまくねえ。けどぜってーボールは後ろに逸らさねえから安心しな！」

ドクンッ

心臓が高まる音のはっきりと聞こえた。

いつもより速く鼓動している。血液が体中に行き渡るのが分かる。

コイツなら俺の全力を受け止めてくれる…

「鳴沢」

「何だ？」

「全日本代表のお前から見て俺の球はどうだ？」

「正直ストレートはお前よりいい球放る奴なんてたくさんいるけどよ、カーブは自信持っていないぜ。あんなカーブそうそう打てねえよ」

「甲子園には行けるのか？」

甲子園その言葉が静かなグラウンドに響いた。

「行ける！！っーか行くから安心しろ！」

大きな声がグラウンドに広がる。

「甲子園…ほ、本気で言ってるの？」

吉井が少々引きつった顔でつぶやく。

「ったりめーだ！！翔和高校を倒して甲子園行くぞ！！！」

「…ああ！」

荒賀が誰にも聞こえないような小さな声で、しかしはっきりとつぶやいた。

「てゆーか聞きたいんだけどなんで全日本代表の凄いキャッチャーがこんな学校にいるの？」

大村が無邪気な顔で鳴沢に尋ねた。

「翔和高校に受験したんだけど落ちたんだよ。んでこの武川高校^{たけかわ}に追募集で滑り込んだんだ」

「全日本代表なら推薦とかもあつたんじゃないの？」

「あつたけど友達と一緒に翔和に行く約束だったんだ。でも…」

またあの記憶が蘇る。
消そうと思っても簡単に消えないあの記憶。

「…ま、悩んでても仕方ねえ！俺は武川に入学したんだ！俺はここで甲子園を目指すぞ！！！」

「俺も…俺も甲子園行くぞ！」

荒賀が叫んだ。今まで必要最低限の言葉しか出さずに感情を表に出さなかった荒賀にみんなが驚いた。

「荒つちあんな大きな声出るんだ…」

「俺も初めて聞いたよ」

「うるせえな」

少し恥ずかしそうに荒賀が言った。そして鳴沢に近付き、

「荒賀 竜一」
りゅういち

もう顔は仏頂面に戻っていた。しかし右手が差し出されていた。

「鳴沢将人だ！」

鳴沢も右手を差し出し堅く右手を握り合った。

2

ここは病棟のとある一室。

4隅に一つづつ置かれているベッド。3つは白髪が入り混じった老人が占領しているが残りの一つにはまだ学生と思われる男がベッドに横たわっていた。

右足は包帯が巻かれていた。

男が暇そうに窓から見える何気ない風景を眺めていると不意に病室のドアが開いた。

窓から視線を外し、ドアの方に視線を向けてみるとそこにはこれまで学生と思われる若い男が2人立っていた。

1人は大きな背に服の上からでも分かる厚い胸板。その存在感に狭い病室が余計に狭く感じられる。

もう1人はきれいな長髪、にこにことした表情で優しい雰囲気からにじみ出ている。

「おお、新崎^{しんざき}に遊佐^{ゆうさ}。毎日悪いな」

「気にするな。足の調子はどうか？」

新崎と遊佐、そう呼ばれた2人は病室にあるイスに腰を下ろした。

「もうほとんど治ってるぜ。あと2週間ほどで退院だ」

「ゆっくり治しなよ。時間はたっぷりあるんだから」

「1年が結構入って来たんだろ？やつと試合が出来そうなのにゆっくりなんて出来ねえよ」

「あと最低でも2人は必要だけどね。それは勧誘でもしてみるよ」

「そういうことだ。それじゃあ俺たちはそろそろ行くか。これから練習なんぞな」

2人はイスから立ち上がる。

「分かった。練習頑張れよ。…さーってまた握力でも鍛えろとしますか」

男はそばに置いてあったゴムボールを手に取りテンポよく握る、開くを繰り返す。

「あんまり無理しちゃダメだよ」

「体動かしてねえと落ち着かねえんだよ。…この前はベッドの上で腹筋してて看護婦さんに死ぬほど怒られたからな。これぐらいしか出来ないんだよね」

「…お前はバカか」

2人は病院から出ると、駐輪場に置いてあった自転車にまたがり漕ぎ出す。

下り坂を下るときに吹く心地よい春風を体全体で受け止める。

下り坂で加速した勢いを殺さないまま2人は平坦な道を駆け抜ける。
しばらくして学校が見えてきた。2人は正門から入り、駐輪場に自転車を止める。

「今日の練習どうする？」

長髪の男が尋ねる。

「そうだな。昨日は守備練中心にやったから今日はバッティング中心で行くか。俺は荒賀の球受けるから指揮はお前に任せた」

「分かったよ」

練習しているサッカー部や陸上部の邪魔にならないようにグラウンドの端を目指す。

そして錆びれた扉を開けて雑草や小石など荒れ果てた道を進んでいく。

「したんだ！俺はここで甲子園を目指すぞ！！！」

第二グラウンドまで残り数十メートルというところでグラウンドの外からでも聞こえるような大きな声が2人の耳に入ってきた。

「聞いたことない声だね」

「甲子園か。いい目標のやつがいるじゃないか」

声の主が気になって2人の歩くスピードが上がる。

「あつ！新崎さん、遊佐さんちわっす！！」

「ちわっす！！」

いち早く2人に気付き挨拶した吉井の後に続きみんなが慌てて挨拶をする。

「おお、ちわっす」

「おはよう」

2人も挨拶を返す。そして、誰に言われなくとも1年生のみんなが2人のもとに集まる。

当然鳴沢もみんなの後について行く。

「今日の練習だが…っとその前に」

チラッと鳴沢の方に視線を向ける。

「新崎さん。こいつも入部希望らしいですよ」

どうやら大きな背の男が新崎らしい。つまり自動的にもう1人の長髪の子は遊佐ということになる。

「鳴沢将人っす！今日から練習に参加させてもらいます！」

右手を額のところに持っていく。俗に言う敬礼だ。

「新崎だ。一応キャプテンやらせてもらってる。こっちは遊佐だ」

「よろしく、鳴沢君」

笑みを絶やさないまま声をかける。ここに女生徒がいたら一瞬で恋に落ちてしまいそうなほどさわやかな笑顔だ。

「ポジションはキャッチャーか？」

「はい。そうっす！」

「よしよし、正捕手が入ってくれたか。これは嬉しい誤算だな」

新崎から小さな笑みがこぼれる。

「じゃあ今日の練習だが」

「ちょ、ちょっと待ってください！これで全員なんっすか！？」

「いや、もう1人いるんだが今は入院中だ」

「その人入れても8人っすよ！？1人足りねえじゃないっすか！！」

大きな身振り手振りで騒ぎ立てる。そんな鳴沢を見て、新崎は一呼吸おいて説明し始める。

「武川高校野球部は2年前に出来たんだ。新しく就任した校長が大学の野球好きで作ったらしい。俺らが去年入部した時が初めての部員だったらしくて当然人数も足りてないわけだから公式戦にも出場していない。だから学校のパンフレットとかには野球部は掲載されているが対外的に活動はほとんど行っていない」

「確かに武川高校なんて聞いたことなかったな……」

「だが！！練習はきっちりと行っているぞ！3人で出来ることは限られていたがそれでも腐らずやって来た。お前ら1年生が入って来るのを楽しみにしてな。……鳴沢、さっき甲子園目指すって言うたのはお前か？」

新崎がまっすぐな目で見つめる。その鋭い眼光に思わず目を逸らしそうになったが鳴沢もまっすぐな目ではつきりと言った。

「はい。俺です」

「本気で言ってるのか？」

「先輩は行けねえって思ってるんですか？」

「……いや、お前以外の一年には言ったが俺は本気で甲子園目指して

る。人数が集まればどんなチームでも俺は目指せると思っている」

「気が合いそーっすね」

「そうだな」

鳴沢が不敵に笑う。新崎もそれに笑い返す。

そして新崎が口を開く。

「武川高校野球部によっこそ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6881/>

Hot Hearts

2010年10月9日05時38分発行